十九歳

芝崎甚馬氏

氏は明治十七年九月をもつて幡多郡七郷村に生る、前高知縣警部保安課長、前高知縣地方警視高知警察署長の肩書は伊達に光つてをるのぢやない、現在は高知縣水産會主事として會長齋藤琢磨氏を補佐し、氏の女房役として遺憾なく立ち廻つてをる、由來警察官を長く勤めた者は他の社會へ出ても何處かにサーベル臭いところがあるが、氏は不思議に左樣な臭氣がない、と云ふのは生れつき如才の無い頭の低い人物だからで、各方面會から好感を寄せて歡迎する所以が其處にあり、隨つて各方面との交渉が頗る圓滑に好結果を奏するわけで蓋し水産會には必要缺ぐべからざる人物であるとは一般の定評だから朗らか〳〵。

宮田管治氏

宮田管治氏は現に四國銀行保險部の主任として重きを爲してをる、明治十三年長岡郡岡豐村に生れ同三十二年明治法律學校に學びその後大阪北濱銀行京都支店に勤務することになり爾來十二年間に及んで、預金係長を經て大正三年四國銀行に轉勤するに至つた、そして本店詰から轉じて後免支店

長を振出しに各支店長を經て安藝支店長となつたが、氏の洒落恬淡無欲にして頗る社交にたけ人に接するに毫も隔壁を設けず、亦能く他人の言を容れる天賦の美質は一点の批難を耳に藉さず朗らかな好感で迎へられたが、昨年停年に達したる故を以て氏は茲に安藝支店長の椅子を最後に袂別勇退するに至つたのである、然るに同行最高幹部の胸底になる氏が多年に亘る行狀とその功勞を重寶視されて再び保險部主任として同行に在勤の椅子を與ふるに至つた、

氏は趣味として書畫、謠曲を嗜み就中謠曲は三十年來の觀世流奥義を極め又虚子派の俳諧に長じて「木籠」と號し有名である

高本音五郎氏

高知市日の出町で日の出の勢ある高本音五郎氏は其の少年時代には裸一貫で水通町で屑物商をはじめたが日露戰爭の時ぼろい儲けをして爾來高知の屑物王となつた、職業に高下はない、絹物を商賣にする者も、屑物を商賣にする者も全然同等で要は正直にして堅實に儲けるものが勝利者である、紙屑營業でも吳服屋營業でも損をして破産するやうになると此の世の敗北者である、高本氏は讃岐の觀音寺町に生れ幼少の頃、高知へ來たものだが青年時代に屑物に着眼した其の眼光は全く偉い、

水通町から現在の日の出町へ移つたのは今から三十余年前のことで氏が二十台の時代であつた、裸一貫から巨萬の富を積んで日の出町の町總代となり、市會議員にも擧げられ高知の實業家として大に持てはやさるゝ氏の現在こそ立派な成功でなくて何んであらふ、氏の如き力の人こそ我等が尊敬の標的である。大に自愛して貰いたい。

瀧本精一氏

氏は高知生魚株式會社々長瀧本鯉三郎氏の第二世である、市立商業學校を卒業して鈴木商會神戸本店に入り發電所、工作所に勤務、後ち高知商業銀行に轉じ大正十二年生魚株式會社に入り冷藏部長として持つ生れた手腕を發揮し好評を博してをる、氏は福澤諭吉翁の如く自尊心が強く、そして機械の研究に天性の嗜好を有してをる、苟くもやり出したが最後トコトンまでやると云ふ意志强固な人物で優に嚴父の後が取れると言はれてをる、趣味は釣と圍碁、本年三十八歳の少壯實業家だから、之れからが活動の天地に移る多望の前途を有して居る、氏の如き堅實の人材を得てゐる生魚會社こそ大に意を强くして可なりである。

岡崎正枝氏

或る支店の奥深く衝立の陰に潜んで眼鏡越に帳面と首り乍ら一日中働いて鞄を握つて出て行く紳士を見た、それは四國銀行の檢査役岡崎正枝氏の姿だつた、氏は明治十七年を以て土佐郡上倉村の出生にかゝり嘗ては高知地方裁判所書記に奉職して、民刑事務の擔任に携はる傍ら遠大の志抱に滿ち頻りに余暇ある毎に法學の研鑽にいそしんだがその後何を感じてか方向を換へ、土佐銀行に入つて檢査課に恪勤すること多年に及びのち大藏省屬に任官されたが、昭和六年歸省して四國銀行に入り重役直屬の檢査役となつて現に同行の檢査課に納まつてゐる、

氏は頭腦明晰で就中專門的業務に携はつてゐる關係上事務方面には如上の事實がその質力を物語つてをるが、多年官界の經歷に富んでをるせいであらう官臭味が去らない嫌があつて人々の頭裡深く印象づけられたものだ、近時多少異變を生じ優さしみと溫情味を持つに至つたといふは要するに實社會の仕事の上に叩きつけら修養の顯れに外ならぬ。好漢自愛せよ。

長尾忠觀氏

氏の先代迄は香美郡夜須村に居住してゐたが明治十九年に一家擧つて高知市に移つたもので嚴父黑

岩魯氏は教育家として知られ帶屋町一丁目で學校を開いて居つた事もある。氏は明治二十四年生れと云ふから本年四十六歳の働き盛り青年時代に大阪工業學校及び長野縣繭業學校を卒業して官界生活六ケ年退職後は實業家を以つて立つべく決心し日本將來の國是は工業立國たるべきを思ひベルトの取次販賣を始めたが四國に於けるベルト販賣の始祖である、氏は其後研究を重ねたる結果商品の取次販賣はダメだと云ふ事を痛感して自家製造を思ひ立ち現在では自分で大阪に工場を置きベルトの製作を成し營林局、各官衙を初め大工場方面の指定品と成つて居る。

氏は更に機械工業の益々必要なるに迫まられ挺身努力、十年前に合資會社を組織し其代表者となつたが規模を大にし設備を完全にせば縣外から購入しつゝある機械類が手近の高知市内で間に合ふ事と成り頗る便利であると云ふ事を痛感し五年前に資本金十万圓を以て株式會社を組織し其社長となつた、氏は更に進んで全國の消防組が内務省令により公設と成りしを以て消防報國の念を堅め主力を消防界に轉じたが消防ポンプ及附屬器具を整備して居る事は恐らく全國無比と云ふてもよい位で多々益々消防界の爲めに努力し實績を擧げて居る、斯樣の次第で消防器具に於ても亦機械工具に於ても今や縣下に於けるナンバーワンたる理由は總てが優秀品であるのと得意先が一流處であるが爲めであつて販賣上自然に嚴格主義を取るに至り店のスローガンとして誠意、徹底、機敏の三項目を

掲げ之を實行してゐる

氏は過去に於ては酒も飲み普通商人の型を以て進んでゐたが靜かに反省して今はクリスチヤンとなり誠心誠意自己の職業に精進しつゝある結果其信仰が事業にも反映して一層の信用を高めてゐる趣味としては外海で鯛、鰹などの釣と狩獵及ドライバーである。

横・矢・順・介・氏

氏は高岡郡戸波村の出身で須崎町の住人である、二ケ年間の小學教員を振り出しに、須崎實業界の有力者浦岡秀吉氏の令嬢を娶りたる關係から浦岡合名會社に入り、これより實業界に敏腕を揮ふことになり、錦浦巡航株式會社を創立して取締役兼支配役となり、大正八年機船底曳網漁業を開始、昭和十年二月須崎町漁業組合長に推薦さる、當時組合長選擧は土居茂樹氏が滿期となり土居派と堀部派の二派に分れ未曾有の大紛擾を起し組合總代會を開くこと十二回、總會を開くこと四回に及び前後四ケ月に亘り幾多の調停者現はれしも徒勞以外の何物でもなかつたが、其の揚句終に滿場一致を以て第三者の立場にある氏を推擧することになり氏は再三固辭したけれど無理に其の椅子をあてがはれて就任したが、氏の就任と共に大風一過組合は至極圓滿となつた、氏は就任以來魚揚場の改

修產業組合制實施の計劃、他町村及び縣外船吸集策などに馬力を掛けてをるが、近時魚揚高が著しく增額したことは全く氏の努力の然らしむる處である、氏は須崎信用組合理事、裁判所調停委員、前町會議員であり、教育家の出身に似合はしく溫厚篤實の德望家で手腕亦た之に伴ふてをるから大に其の將來に囑望されてをる。

武正德夫氏

祖父修吉氏嚴父勇氏共醫師であつたが德夫氏は三代目の醫師として令名あり郡部に置くのは惜しい人物である大正四年千葉醫科大學卒業後同校附屬病院にて研鑽を積み大正十年須崎町で開業今日に至つて居る。

昭和九年三月高岡郡醫師會長となり縣醫師會議員を兼ね須崎尋常小學校校醫をやつてゐるが資性溫厚篤實にして圓滿、患者に接する事が頗る親切で一般から「先生〳〵」と云つて敬愛されてゐる、謠曲は氏の得意とする處で又た仲々の玄人であるとのことだ。

令兄一氏は大正四年東大卒業後同大學にて內科研究其後山梨縣立病院長となり二ケ年程在職、次ひで漢口同仁會病院長となり今日に至つて居るが其間一ケ年間歐米各國に留學を命ぜられ專心研究、

同地に於ける刀圭界のオーソリチーとして其名が高い

令弟敏夫氏は大正八年東大工科卒業遞信省管船局に技師として奉職、高等三等の地位を贏ち得前途尙多望なりとの事だ。

岡林信衞氏

氏は明治十三年を以て香美郡田村に生る、尋常中學海南學校の出身にして日露戰役に從軍出征して奏功あり胸間を飾るに輝やかしい功七級勳七等の所持者である、明治四十年四國銀行に入社しその後各支店を經て現に用度課長の椅子に据つてをる、氏は天性卒直にして忠實に立働くことを何よりもの天職と心得た勤勉家であり行內に於ける評判がよろしいので、旣に昨年を以て停年制に達したが尙且つその職に留まることは奈何に氏が事務的忠實たることを裏書すると共に、最高幹部の胸底に重寶がられた所以であると謂はざるを得ないのである。

西內龜太郎氏

立志成功傳中の模範的人物である、氏は須崎町紀町の產、家は代々の大工職、氏は九歲の時父に死

別し赤貧の中に弟妹三人を養育しつゝ徴兵檢査を終るや獨立して些細な米屋を古市町に始め、朝は三時に起き夜は十時まで働き、晴天の日は在所からの客を相手に商賣し、雨の日は津野山方面から越知方面に日返りの注文取りに出掛け往復十八里の道を徒歩し、艱難汝を玉にして漸次商賣を擴張し米以外鹽、人造肥料の販賣から帆船の建造から廻漕業にまで發展し四十三年間の奮闘努力が積り積つて今日の大成功となつたのである、氏は二十二年間町會議員に擧げられるし、又た信用組合を設立して其の理事に擧げられるし、須崎起業株式會社の社長に擧げられるし、昭和病院を創立せしめて其の理事に擧げられるし、凡そ須崎の事業界で氏の關係せぬものは殆んど無いと言つてもよい程で如何に其の人望の盛んなるかを知ることが出來る。

氏は大の子福長者で長男一郎君は神戸高商卒業後、大阪鐵工所に三年間勤め現在は家業を切り廻してをる、次男國次郎君は京都帝大法科出身、現在須崎郵便局長を勤め、三男巖君は帝大醫科出身、現在大連病院に在勤、四男五郎君は高知工業を出て神戸製鋼所に勤務、五男大六君は帝大醫科の三年在學中、六男龜君は城東中學を卒業し健康關係で家庭に在り、七男平八郎君は早稲田大學在學中で年齢二十歳、体重二十一貫五百匁、身長六尺豊かの堂々たる偉丈夫だから東京相撲協會役員代議士胎中楠右衛門氏へ代議士田村實氏を通じて申込んだが結果國技館角力協會に入ることになつた、

欠

み過般名工の作と稱せらる珍品粟生屋燒噴水器を堀出し一躍好事家の垂涎の的となつたが一面蘭山と號して縣下に於けるアマチューアー陶工師を以て任じ同行の中川半九氏と共に其の名を知られ玄人燒物師もその技術にははだしと謂はれる。

中村信之氏

氏は高知市新町の出身である少壯時代は陸軍々人であつたが日露戰爭後、神戸の三菱造船及鈴木商店に在職各十餘年間、歐洲戰爭起るや其機運に乘じて大に活躍を試み忽ちにして巨萬の富を得たので神戸で海運業を營み盛んにやつてゐたが爾來氏は日本酒の改良を企て理想的の酒を造るべく苦心研究實に十餘年財を費す事十數萬圓遂に之を完成し各方面から多大の賞讃を得るに至つたので忽ち大阪で大資本家が出來將さに釀造を開始すべく準備を整へたが時偶々某實業家から土佐の石灰開發の懇請があつた氏思へらく酒造は私事、石灰山の開發は高知縣の公益事業だ斷じて等閑すべきでないと即意を決し其懇請を容れて昭和七年から高岡郡斗賀野、吾桑、多ノ郷の三村に跨り三百八十町歩の石灰山を買收して土佐石灰工業株式會社を創立し事務所を須崎町に置いて支配人となつた之の石灰工業は日本セメント果のオーゾリチーたる大阪窯業セメント會社が全株を所持せる爲め其

欠

基礎の鞏固にして堅實なることは敢て云ふ迄もない月産六萬トンの原石を輸出すると共にセメントの製造及石灰化學工業を營むべく着々として其歩を進めつゝある際偶々地元に於て他會社と土地の交渉問題起り多少の遲滯を來たしてゐたが縣及關係地元の斡旋に依つて解決が出來、近く萬端の設備を完了して着手する事となつたので將來大有望の事業として縣民一般から囑目されてゐる

氏は資性恬淡、磊落にして硬骨、豪放にして而も細心加ふるに俠心と同情に富み婦女子の如きも一度び氏に接せば自から懐かしみを感ずるの風がある剛にして柔とは即ち氏の如き人物を云ふのであろう氏は少年時代から武道をよくし日露戰爭の時には騎兵斥候として十數日間深く敵地こあつた事があるが其剛膽不敵の行動は忽ちにして偉功を立て奥元帥より感狀を授與せらるると共に金鵄勳章を賜つた趣味としては網と釣りであるが酒も亦た其一に數へられてゐる

鶴見宗利氏

氏は明治二十四年一月二日をもつて北越金澤市に生る、氏の家は嚴格なる士族であつたから氏は幼少よりスパルタ式の家庭教育を受け其の嚴格なる教育で心身を鍛錬し、縣立金澤商業學校を優等の成績で卒業するや、大阪商船株式會社の會計課に勤務し、後ち高知支店の會計主任を命ぜられ、再び本社詰に轉じ、再び高知に來つて支店船客荷物部の主任となつた、そして同社支店が土佐商船會社となるに及んで庶務課主任となり、常務小林民吉氏を補佐して其の懐刀ともなれば女房役ともなり大いに敏腕を揮い社内の信望を集めてをる、氏の性質は至つて溫厚で其の社交振りも亦た至つて圓滿である、蓋し土佐商船會社に缺ぐべからざる事務家なりとの斷定を朗らかに生むのである。

山崎嚴龜氏

氏は吾川郡長濱町の出身、明治十六年十一月一日生れと云ふから本年五十四歳、明治三十四年三月一中卒業、同年十二月海軍兵學校入學同三十七年十一月卒業、少尉候補生と爲つたが時恰も日露開戰の眞最中で翌年の一月には東郷大將の坐乘せる旗艦三笠に乘り組み同年五月二十七日の日本海大海戰に參加して克く其任務を果たし同年八月三十一日少尉と爲り順次累進して大正十四年十二月大佐と爲つたが其間海軍造兵監督官兼造船監督官の要職に在つた、退職後郷里長濱に歸へり悠々自適すること三年餘、昭和四年町長に推され同八年迄在職、其傍ら昭和五年から同町信用合組長として就任今日に至つてゐるが海軍大佐、正五位勳三等の肩書を有し同町の先輩、元老株として隱然重きを爲してゐる

趣味としては格別ないらしく酒は相當やつたものだが今は禁酒同樣とのこと氏には三男三女あり二郎君は城東中學卒業後日本體操學校に入學目下同校在學中、康三君は城東中學五年、健央君は同校二年何れも在學中で長女は海軍大尉の谷岡平八郎氏に嫁し二女經子さんは土佐高女三年在學、三女衣子さんは學齡未滿の幼女である

小島益甫氏

曲水派の俳人仲間で汀村と號して可成り古い前から名高い小島益爾氏は明治二十七年市蓮池町に生れ私立商業學校出身の俊才で在學中既にその逸才を當時の校長であつた横山又吉氏にみとめられ非常に寵愛されたもので又書道に達し東村翠濤氏の高弟と稱され頗る堪能である、明治四十五年四國銀行に入社するや忽ち氏の緻密な頭腦と迅速な事務振りは一躍拔擢されて平行員より爲替課長を命ぜられ今日に至つてゐるが、そこに最高幹部の胸底を見ることが出來る、又氏は銀行事務の全般に精通し殊の外行員中でも英文堪能だと聞くが決して自ら驕る所なく隱忍自重の風景など愈々その人と成りを伺ふに足る。

小松牛次氏

氏は小松喜之助氏の四男明治十四年二月生れだから本年五十二歳、前には高知市水通町三丁目に居住してゐたが大正十一年十一月堺町ねぼけ開業、、大正十四年六月現在の八百屋町に新築移轉したものである新理の味のよい事は同業者中の最右翼であると云つて恐らく溢美ではあるまい、料理と云へば誰れも先づねぼけを聯想する程で何時も千客万來の大繁昌を極め仲居のサービスも上等である、ねぼけは八百屋町の本店の外に新京橋の西詰に喫茶店昭和五年六月二十七日新築を開業してゐるが大衆向で而も場所が市中隨一と云ふ所から何時も滿員狀態でねぼけの支店と云へば誰知らぬものもない尙この外に新京橋岡林牛肉店の西側に食堂西店を設け昭和八年一月から開業してゐる、更に浦戸灣遊覽者の爲めにねぼけ丸を新造し昭和八年十二月から開業してゐるが之のねぼけ丸は二十八人乘りで船で料理し棧橋、農人町何れからでも乘船し得る事としで遊覽者の便をはかり又た希望者には貸切りもする事になつてゐる

氏は子供がなく趣味としても格別ない仕事一式の人物であるが夙に敬神の念深く熊野權現、伏見稻荷、八島神社の三社を勸請し約一万五千圓の經費を投じて昭和八年十一月中浦戸町に社殿を建て又

德島縣津田町へも同じく前記三社を勸請し本年春同額の經費を以て社殿を建立した、如斯氏が莫大の費用を投じて社殿を建築したのは「自分も拜み又た人にも拜がんで貰ひ度い」との念願であるとのことである

氏は幼少より壯年時代にかけ幾多艱苦を嘗めたとの事であるが堅忍不拔の努力と奮闘は遂に克く今日の大成功を贏ち得た譯で氏は一代成功者として正さに立志傳中の人物である

勝田一雄氏

大阪朝日新聞が世界の大新聞として偉大なる信用と絶大なる權威を持ち社會の木鐸として一世を指導しつゝあるととは敢て贅言を要しない全世界に通信網を張り其報導は迅速にして正確又た社說の如き地方新聞の樣な薄つぺラな常識論とは大に其趣を異にし流石に大新聞の言論として推服に値するものがある每日全紙面を通讀して行けば一廉の人物となれることは請合だ

近時地方新聞の影が次第に薄くなりて其の讀者が漸減しつゝあるのは果して何物を意味するか敢て說明する迄もあるまい

之の大新聞の支局長は誰か……京都府相樂郡加茂町出身の勝田一雄氏である氏は明治二十八年二月

五日生れで本年四十二歲、奈良縣立郡山中學卒業後早稻田大學に學んでゐたが後轉じて國學院に入り同校卒業後大正十二年四月同社の記者となり神戸、吳、廣島、高松等の各支局に勤務の後昭和四年大阪本社に於て編輯事務に當つてゐたが同九年十二月高知支局長として來任したものである

氏は穩健正實にして人格高潔、操觚者として敏腕の聞へあり優に支局長としての貫錄を具へてゐる

趣味としては碁、夫人富美子さんとの間に學齡未滿の一男一女がある

箕浦豊雄氏

氏は廣島縣廣島市の出身、明治三十六年六月三日生れで本年三十四歲、大正十五年三月京都藥學專門學校を卒業して直に軍隊に入り幹部候補生として昭和二年二月迄軍隊生活を爲し陸軍三等藥劑官正八位の肩書を有してゐる

退營後高知市に來住、末德屋材料店藥品部主任として勤務してゐたが昭和二年七月吾川郡長濱町で現在の藥局を開業し今日に及んでゐる

氏は大日本武德會から柔道五段の允許を得て居る人物丈けあつて資性恬淡、男性的氣象に富み其裝飾なき態度、應接と献身的にして而も快活なる活動振りは蓋し有爲の材として深く町民の信賴を得

昭和八年三月在郷軍人分會長に推されて盡瘁今日に及び又た長濱青年學校柔道教師、三業組青年學校名譽柔道教師として青年の指導鍛錬に當り傍ら長濱町南地總代長、長濱信用組合總代等の公職にあるが三十四歳と云へば自立を越ゆること僅かに四歳の壯年、氏の仕事は之れからで前途は益々多望であろふ

趣味としてはスポーツと謠曲であるとのこと、夫人小照さんは本年二十八歳二男一女を擧げ長男滿雄君は長濱小學尋常科一學年生、二男二雄君と長女志津さんは學齢未滿で家庭に遊んでゐる

溝淵勇太郎氏

明治三十一年長岡郡大篠村に生る、海南中學校を出た歩兵少尉で曾て高陽銀行に入り上街支店長となり其所に御輿を据へてゐたが、昭和五年に至り同行が四國銀行と合併せらるゝと同時に氏も又四銀に入り信用と興望を負ふて直ちに北街支店長となりその後本店預金課長に命ぜられ今日に至る、性格は柔和で若曹に似合はゞ接する所老幼の差別なく人さわりがよいのと、市内の商家に多くの知己を持つ關係から多大の信頼と期待とを持つて行内に重きをなしてゐる、然るに氏は一日の行務を終つて自邸に歸るや想ひを郷土の農業改發に努め又自らも鍬を取つて大いに田園に親しみその範を

示し今や郷黨に於ける模範青年として賞嘆されてゐるとは敬服の至りである

北岡龜太郎氏

「仙骨」と號する土佐俳壇の宗匠として夙に一家を成してをると言つたのみでは氏の全貌が判然しない、氏は俳句の天才でもあるが亦た歴記とした高知の實業家で、高知商工會議所の議員もやつてをるし、土佐商工聯合會の評議員をもやつてをる、氏の出身は比島だが、市立商業學校卒業後、一時土佐農工銀行に勤めたこともあつたけれど、元來商業によつて身を立てんと欲することが其の素志であつたから、農工銀行を辭して本丁筋の島崎硝子店に入り此處に腰を落ちつけて模範店員の名を取つたが、二十三歳の時、店主の死去と共に自ら獨立して同町に硝子業を開店し大に奮起して同業者を驚かし次第に發展の好運に惠まれ、今や高知板硝子商組合長の榮職にあり、悠々十七字を弄する餘裕を生じ其處に詩と商賣とを融和せしむる新天地を開拓してをる、氏は者性剛直、自信を行ふに最も勇敢だと稱せらる、

西内政次郎氏

氏は明治十年須崎町に生れ少年時代に一中今の城東中に在學中病氣の爲め退學、後に今の商科大學

の前身たる大阪市立商業學校を卒業し有爲の青年として前途を囑望されてゐたが其後高知銀行常務取締役となり敏腕を揮つて行務に執掌中日露戰爭が起つたので召集せられて出征した、凱旋後は東京、大阪等で各種の方面に關係し活躍して居つたが八年前に歸へり消防後援會々長、錦浦保勝會副會長、軍友會々長等に推され隱然重きを爲してゐる

氏は頭腦明晰、談論自から理路整然として腦中一種の經綸抱負あるを思はしむるものがある蓋し同町一方の雄たるを失はない趣味としては碁と俳句であるが仲々堂に入つて居るとの事である長女良惠さんは女子大學卒業後會て大倉男の秘書となり現在では大連の日清製油の常務である廣島縣人佐久間寛氏に嫁してゐたが四年前に死亡、二女昌子さんは東京音樂學校卒業後、山口縣人吉村常平氏（嚴父は小野田セメント名古屋工場長）に嫁し一男を擧げたが五年前に死亡、之の兩女の死に對しては氏も亦た今尙ほ心中自ら一沫の哀愁を押へ得ざるものがあろう。

藤宗民藏氏

高知の藤宗といへば誰も知つてをる、生絲の藤宗は昔から有名で最近は藤宗綿布毛織物店が兎ても名高くなつて來た、此の一事に徵するも氏が如何に商賣に老巧であるかゞ判る、氏は慶應三年九月十八日を以て香美郡前ノ濱に生れ、十二歳にして慈父を失ふに及び弱年ながら商業で身を立てんと

の志あり、十三歳の頃、後免町野島呉服雜貨店に丁稚奉公をして具に辛酸苦楚をなめたが、後ち山田の阿部洋物店、生糸商店などの店員として數年間働くうちに僅かながら貯蓄が出來たからソレをもつて高知市に出で生糸仲買を始めた、これが氏の今日ある抑もの最初である、そして明治三十一年店舗を堺町に構へ、三十七年現在の本町一丁目に移り綿糸をも取り扱ふことになつた、資性溫厚篤實、且づ思慮頗る周密で興亡盛衰端睨すべからざる糸業界にありて克く方針をあやまらず幾多先進業者の沒落せる間に處して斷然一頭地を抽出し今日の金城を築いたのは確かに偉いと敬服する、氏は苦勞人だけ世間の人情も機微も一切解つてをる、前には高知商工會議所の議員にも推された、長男龍吉氏も中々の勤勉家で常に目先きが利き昭和七年本町二丁目に支店を開き綿布、毛織物で華やかに發展してをる。

尾崎莊氏

基督教の篤信者で現四國銀行出納課長の重要な地位を占む、尾崎莊氏は明治十七年幡多郡中村町に生る、高知縣師範學校の出身で長崎縣の普通文官試驗に應募しパスした秀才である、明治四十五年四國銀行に入り爾來後免支店長を經て今日に至つてをるが、氏は人となり資性溫厚にして一見君子の風格を備へた人格者だ、仕事の餘暇にはテニスを唯一の娯樂として此の道にかけての達人である

といふ。

村田稻衛氏

氏は明治十四年故村田芳太郎氏の長男として高知市農人町に生れ、少年時代より家業の蠟燭製造を手傳ひ、明治三十四年店舗を合名會社に組織するや、自ら其の代表社員として諸種の營業課目を擴張し、傍ら三人の實弟を指導鞭韃して相俱に刻苦奮鬪苧りに商界に活動して遂に今日の隆盛を見るに至つたものだ、ことに氏の店舗は合名會社の魁で本縣における最古の歴史を有しており其の基礎の堅固なることは世人の熟知するところである、氏は性溫良着實で平生本綿の筒袖で働くといふ流儀で華美が嫌いである、徹頭徹尾眞似目な人物であるから町總代にも推され、高知乾物株式會社取締役をも勤めてをる、蓋し商界の模範的人物である。

富田幸次郎氏

土佐の生んだ大政治家だ、その昔し土陽新聞の記者をしてゐる時代には衆議院議長の片岡健吉氏が社長だつた、富田氏のその時の理想は蓋し「片岡先生のやうになりたい」と云ふのであつたらふが、當年の念願達成して今や政民兩黨より推された二十五代目の議長となつて、今年の冬からは中島信

行男も、片岡健吉先生も、森田茂氏も腰を掛けたことのないスエス以東第一の大建築と言はるゝ國產建築の最高峰、精彩ゑき〳〵たる總工費二千六百五十万圓の新議事堂の新議長席に納つて四百五十九頭顱の有象無象を兒曹視することになる氏は明治四十一年以來當選九回だから政界では押しも押されもせぬ古豪の方だ、後藤象次郎、大石正巳氏等の衣鉢を繼ぐ熱心な政黨大同團結の主唱者で昭和六年、當時民政黨にあつて內相だつた安達謙藏、政友會の久原房之助氏等と氣脈を通じ擧國協力內閣を主張して第二次若槻內閣を內輪から倒壞せしめたことがあつた、その後再び民政黨に長老として迎へられ隱然重きをなし、大臣級以上の人物をもつて遇せられた、人情味あり線の太い今時一寸珍らしい型の大政治家で度胸骨もしつかりしてゐるから天晴れ名議長の貫祿は十二分以上と言ひ得る。

氏は帝都の記者連から双川宗匠といはれてをるが、何んでも俳句を始めた動機は、第一區の山村の選擧演說で甲の會場から乙の會場まで二時間もゆらり〳〵人力車に搖られてゆくのはとても眠くて堪らない、といつて眠つてしまふのも時間の不經濟だし、車上悠々俳句の想を練るに限ると杉指月氏などの入知惠を鵜呑みにして始めたのだつたが、最愛の令孃に先立たれた時には「亡き魂は何處ぞ闇のほとゝぎす」とやつてお通夜の人々を泣かした議長就任の感想は嶮しくも花野への路疑は

す」、『踏まれてももえ出る草の力かな』で憲政は今興廢の危機に立つてゐるがわしは決して立憲政治には絶望はしてゐない、やがてはきつと憲政花やかな時代が來るぞといふ意を十七文字に盛つたものだ、これでこそ憲政の祖國土佐が送つた新議長だ、冀くは第二の板垣と爲つて下さい至囑々々

永野修身氏

高知市南新町の井出淵を通る者は從三位勳一等功五級海軍大將、海軍大臣永野修身氏生誕の家を見るであらふ、土佐から大將を出し大臣を出すのは珍らしい、氏は近代土佐の生んだ巨人で近き將來の内閣總理大臣を約束せられてをる、今春五、五、五の巨彈をブツ放して決裂の軍縮會議を尻目に歸朝した日、海相の椅子が待ち設けてゐたのだから幸運連續線だ、もつとも家庭の方は不幸つゞきで二人まで奥さんを病死させたが、現夫人京子さん(三二)は絶世の佳人で、二人連れで東京の街を散歩すると『お嬢さんですか』といはれるさうだが、氏は明治十三年六月十五日生れで海南中學校では鷹匠町の住人在郷海軍大佐北村榮虎氏と同クラスだつたと聞く、沈思、果斷、豪膽、明治三十三年海軍兵學校を卒業日本海の大海戰には大尉として出征、金鵄勳章を授けられ、第一遣外艦隊司令官、練習艦隊司令官、兵學校長、軍令部次長、横須賀鎮守府司令長官などを經て昭和九年大將、十

年軍事參議官となり、今春ロンドン軍縮會議に全權として使したもので軍縮會議は二度の勤めである、ブツキラ棒で牛のやうな感じがするが非常時海軍の押へは十二分に利く、五十七歳

海相、今春衆議院の初答辯で壇上に上ると開口一番「私は生れて初めてこの壇上に立ちまして」とやつたので先づドーツと來る、次いで「この際私が軍縮全權で外遊しましたときは絶大なる御後援を賜はり……」と感謝演說をやつたので再びドーツと來る、その後で『海軍と致しましては……』と簡單な本筋の答辯を二三言喋つて引下つたので三度ドーツと爆笑……答辯は超滿点の御愛嬌。

昭和十一年十二月二十日印刷
昭和十一年十二月三十日發行

定價五円

高知市八軒町六番地
編輯兼發行者　山崎幸馬
高知市愛宕町一丁目一番地
印刷者　秋永源一
高知市城見町二番地
印刷所　誠貫堂
高知市八軒町六番地
發行所　高知尙文社

終